竹内好

新編

魯迅雑記

勁草書房

竹内好

新編 魯迅雑記

勁草書房

著者紹介

1910年　長野県に生れる
1934年　東京大学文学部卒
著訳書　「現代中国論」「竹内好評論集」
「魯迅文集」「中国を知るために」他

新編 魯迅雑記

1976年11月20日　第1版第1刷発行
1977年5月25日　第1版第2刷発行

©著 者　竹内好（たけうち よしみ）

発行者　井村寿二

発行所　株式会社　勁草書房
東京都文京区後楽2—23—15
TEL(03)814—6861
振替 東京 5—175253

印刷所・浩文社，製本所・和田製本
落丁本・乱丁本はお取替いたします。　0095—858900—1836
*定価はカバーに表示してあります。

目次

第一部

魯迅論……3
魯迅の死について……13
「藤野先生」……29
魯迅と毛沢東……33
魯迅と許広平……42
魯迅と林語堂……54
魯迅の言と行——中華六十名家言行録のために——……65
「狂人日記」について……69
魯迅と日本文学……82
「阿Q正伝」の世界性……96

魯迅と二葉亭……105

第二部

ノラと中国――魯迅の婦人解放論――……113
ある挑戦――魯迅研究の方法について――……126
ただ真実を追う――生涯を貫く誠実と実践――……141
ゴルキイと魯迅……146
魯迅の評価をめぐって……148
「横眉」の詩の解……158
魯迅の日に……161
読者へ――『魯迅入門』序――……164
中国における魯迅研究書……168
『魯迅選集』の特色……175
花鳥風月……180
魯迅の読者……186

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

魯迅の思想と文学――近代理解への手がかりとして――……197
魯迅文学の鑑賞態度について……204
魯迅のよみかた――日本での紹介のされかたにふれて――……216
編集付記……飯倉照平 221

第一部

魯迅論

魯迅の毒舌は大抵のものが怖れている。冷嘲と呼ばれ、一たび筆鋒に触れれば骨を刺す寒さを論敵は覚悟しなければならない。今年の春、日本の雑誌に載った一文（「私は人をだましたい」）を、日本人は、彼の悲痛な擬態として受取ったようであるが、実は自然のままの冷酷な表情と見るべきではないか。毒舌を吐いている中に文章がうまくなって、冷中熱を帯びた格調は当代に並ぶものがない。まこと村正ならで「寸鉄人を殺し、一刀血を見る」（郁達夫の評言、「中国新文学大系散文二集導言」）のが彼の文章の面目である。

二十年の文壇生活を喧嘩で過してきたようにも見える。新月を罵倒し、創造社を罵倒し、小品文派を攻撃し、最近は文芸家協会とはり合っている。人気も集めたが、恨も買った。偽善者、ドンキホテと罵られたことも一再でない。罵られれば罵り返す、喧嘩は買って出る。

「これは一事件の結末ではない、これは一事件の発端なのだ。

墨で書かれたタワゴトは決して血で書かれた事実を瞞着することは出来ぬ。
血債は必ず同じ血で償還されねばならぬ。長く怠れば怠るほど、更に大なる利息を付けねばならぬ！」（「無花的薔薇之二」増田訳）

これは段祺瑞に向けられた「匕首」であるが、「文人相軽」の場合は戦闘意識が割引されるとは考えられない。

諷刺と逆説が武器である。網にひっかかってくる獲物は、徐に引廻して相手を奔命に疲らせた後、容赦なくとどめを貫く。「重要な点は、引把えた後、僅に三言両語を以て主題を道破し、次要の点、若くは、同じく重要でも敵の死命を制し能わぬ点は一概に措いて問わぬ」（郁達夫、前掲）のが彼の論法である。新月の場合でも、女師大問題の場合でも、そうであった。洗い立てたらきりがない。骨の髄までしゃぶる執拗な食下りと、貪婪さを持っている。中でも壮絶を極めたのが創造社との出入りで、相手が「破落戸」だけに、最も効果的な嘲罵を浴せるために注がれたお互の努力は並々ならぬものであった。その中の幾篇かは、いま読んでみて、係わりのない読者にさえ不快を覚えさすものがある。魯迅にしてみれば、創造社（勿論第二次）の思い上った革命文学ぶりが鼻もちならぬ乳臭で癇癖に触れたであろう。「革命、革革命、革革革命、革革……」（「語絲」四巻一期、銭杏邨「死去了的阿Q時代」より）これは魯迅のいたずらである。大抵、駒は冗談から出るものだ。それからはお互に精魂を尽して罵り合っている。当時の創造社（及び太陽社）対語絲派の論戦というものが、日本でもそうであった

が、一方がマルクス主義の公式で遮二無二突込めば、一方が水を差すという形であった。巧妙な罵辞を創造することだけが考えられた。当時の時代が、頭だけで革命を動いていたのである。その間に処して、魯迅ひとり冷静に文学上の李立三コオスに立向ったとするのは、魯迅のためにも事実を誣うるものである。それは、後で談られた次の言葉が示す。

「あの時、自分は、マルクス主義の射撃法を心得たものが現れて自分を狙撃してくれるのを待っていた、しかし、とうとう出て来なかった。」(「対於左翼作家連盟的意見」)

これは左連の成立大会席上での演説である。ポオズはあるが、珍しく弱気な、不測の中に真実を洩したところがないでもない。誰もが結局、マルクス主義を理解していなかったのである。魯迅は勿論——むしろ彼は最後の人であった。大体、あのような辛辣な逆説が生れるということ自体が、激しい自己矛盾の結果としてしか理解の方法がない。他人に向ける刃ならばもっと柔くていい筈である。革命文学を揶揄した時は、自ら革命を理解するために力めていた時であった。創造社にしてもが、余裕あって「奥服赫変(アウフヘーベン)」や「瑞(ドン)魯迅」を振かざしたのではない。ひた押しに圧迫に馳られた衝動であった。この点は「今日革命八月八日のこの革命日の革命朝の革命九時の革命時刻に、革命申報上に革命広告を見た」(「革命広告」)郁達夫とも選ぶところがない筈である。血みどろなのは魯迅だけでなく、創造社だけでなく、無論、段祺瑞に殺された女師大の学生劉和珍(魯迅「紀念劉和珍君」)だけではないのだ。怖るべき俗論は、魯迅を先覚者に仕立てることで、もし魯迅が英雄であるとすれば、正にその反対の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

理由こそ、自己を分裂のまま受取る凡庸さの故にこそ、彼は英雄でなければならない。

作品についてみる。

「狂人日記」の書かれたのが一九一八年、「新青年」の四巻五期である。

「狂人日記が初めて新青年に発表された時、本来文学とは如何なるものであるかと知らなかった私は、読了するや異常な興奮を覚え得て、友人のところへ行けば、直ちに彼等に喋った――中国の文学は一つの新しい時代を画せんとしているぞ、君は狂人日記を読んだかと、街を行くときには、路行く人に向って私は私の意見を発表しようと思った……」（「魯迅在広東」増田渉「魯迅伝」より）

「狂人日記」が迎えられた熱狂ぶりは右の言葉に尽きている。このことからは次の二つのことが言われなければならない。即ち、新文学の最初の作品であった、という意味は、文学者としての自覚をこめた最初の態度であったこと、それにも拘らず、第二に、イデオロギイ的には当時の進歩した知識階級層にいくらも先んじてはいなかったこと。呉虞の「家族制度為専制主義之根拠論」は一年前に書かれている。のみならず、半年後には既に周作人の「人的文学」が現れている事実。（ついでながら、呉虞は「狂人日記」のために歴史上から食人の文献を調べ上げた。――「吃人与礼教」、以上いずれも「新青年」）

狂人日記は、封建的桎梏に対する呪詛ではあるが、その反抗心理は、本能的、衝動的の憎悪に止り、個人主義的な自由な環境への渇求を明かにしていない。だから、大衆感情の組織者ではあっても、先

駆としての意義は甚だ稀薄なものとなる。大体、彼の作品につきまとう東洋風の陰翳は、生活に受込んだ民間風習に由来するものであろうが、儒教的でないまでも、特に倫理的色彩に於て、気質的に、近代意識の反対者たる百姓根性を多分に脱ぎきれぬものがある。（当然のことながら、題材だけを取上げて言うのでは決してない。）「狂人日記」「阿Q正伝」の二三を除けば、魯迅の作品は、概して問題にされなかったし、人間的興味から手堅い古典的手法を賞鑑されることはあるとしても、それが魯迅のために、また現代中国文学のために、名誉とはならない。郁達夫はこれより三年遅れて「沈淪」を書いている。譬えてみれば「狂人日記」は「浮雲」に、「沈淪」は「蒲団」に当るかもしれないが、この譬喩は、二葉亭と魯迅との比較の一点で、多くの外形的類似にも拘らず、魯迅が理想家ではないという致命傷を負っている。いい換えれば、魯迅の場合は、設定された目的意識なり、行動の規範なりを持たなかった。気質の上で大差のない周作人が、北欧風の自由思想を取入れて、一種ニュアンスある個人的虚無哲学を作り上げたのに較べると、魯迅の方は、あくまで文学者の生活であり、それだけ観念的思索の訓練を欠いた十八世紀的遺臭を伴っている。一歩を先んじたかもしれないが、超ゆべく要請された十歩を、時代から超え得なかった。ゴオゴリ乃至アンドレエフたり得ても、ニイチェたり得なかった。（「中国新文学大系小説二集導言」中の自己批判参照）これが魯迅の宿命的矛盾であり、魯迅に表現された意味で、現代中国文学の矛盾でもある。後年、彼が創作を絶ったのは（「故事新編」中の諸作は問題にならない）彼の場合だけではないが、「手で書くより足で逃げる方が忙しい」（増田渉「魯

迅伝」）からではなくて（この言葉には魯迅の「嘘」がある）彼の手が頭を追えない結果である。否定的情熱としてよりほかに自己の矛盾を観念的に処理し得なかったからである。

この矛盾は「阿Q正伝」に移ると一層はっきりした形をとってくる。

この農民小説――といわれる――は、農民を、ルンペン農民を描く意図を最初持ったことは疑ないが、遂に主観の色濃いものになり了った。現実にあり得べからざるように見えて、実は極めて現実的な阿Qの性格は、無色にまで抽象化された一種の類型で、それ自身、ゴオゴリ的な、諷刺的存在である。諷刺といえば、阿Qが「一度発表されると、かねて魯迅と善くなかった者達が、あちらからもこちらからも、自分の悪口を言ったものだと蛙のように騒ぎ立てた」（増田渉「魯迅伝」、魯迅「阿Q正伝的成因」参照）のもゴオゴリの場合にそのままであり、文学史家流に言えば、この二つの民族と時代とには確かに共通なものがある筈だが、ゴオゴリについて知らぬから今ここには何も書けない。魯迅の場合について言えば、少くとも「阿Q」が書かれた真実性の前には、阿Qが農民であることは、はるかな偶然に過ぎない、とだけは言えそうである。「阿Qの性格はその頃の支那の誰でもがその全部或はその一部分をもっていたところだ」（増田渉、前掲）とすれば、何よりもまず、阿Qは魯迅自身の引裂かれた分身ではなかったか。この仮定は一見、根拠のない妄説のように受取れるかもしれないが、前に書いたように、彼の逆説的筆法、アフォリズム形式が、自己矛盾の表現であるとした見方に立てば、魯迅が阿Qの中に自己の戯画を眺めるということが、そう不自然でない妥当性を持ち来すと思う。

ここでは、阿Q的存在は当然、魯迅の批判の対象になっているのだが、阿Qも亦、自然主義作家魯迅（たとえば「祝福」）の批判者として登場しているのである。「阿Q」のテエマが、革命は成功した、しかし革命は成功しなかった、という点にあることを注目しなければならない。「狂人日記」では、否定的情熱として作家の生命を燃やした矛盾が、ここでは、政治とイデオロギイの乖離という歴史的事実を借りて自己批判をやっているのである。だから、この人間的成長――歴史に伴って曝露されてゆく自己矛盾――の反面には、作家としての燃焼が終焉に近づくという悲劇が隠されているのかもしれない。事実、これから魯迅の「彷徨」が始っている。これが悲劇なら、現代の中国文学全体が悲劇であるとも言えるのである。

政治と芸術との相剋は、現代中国文学の基本的性格である。転換期の文学は、その本来の進歩性の故に、自ら殻をつき破る冒険を敢てしなければならない。歴史上では、魏晉や明末がそうであった。一九二五年から三〇年にかけて、所謂大革命の時代に、魯迅自身が、彼の描いた阿Qの役割を再演しなければならなかったのは、傍人の如何ともなし難い芸術家の皮肉な運命であろう。しかも、この転身を、彼は極めてあざやかにやってのけた。一九三〇年、自由大同盟を経て成立した左連の椅子には、魯迅その人が坐っていたのである。彼は、その準備のために、創造社と悪態をつき合う暇に、多くのマルクス主義文学理論を翻訳している。だから、この転身は、彼の人並ならぬ聡明さを物語るものであるが、同時に、そこに現代中国文学の脆弱性を窺うように思えてならない。思想の氾濫――という

のは、むしろ当らないので、発酵せずに追いやられる、思想性の欠如が、徒に小品文派に温床を与えているのである。自らの個人哲学を築き得なかった魯迅の矛盾が、肉体的に解決されることなしに、新しい客観世界での苟合的統一に安んじているに過ぎない。この批判は、魯迅のため酷であるかもしれない。彼は、作家としての破滅よりも、所謂「文化の指導者」としての甦生を願い、且つその境地に甘んじたであろう。このことの当否は措き、転換期の一つの型をそこに見る。魯迅にとって必ずしも容易でないこの苦行の道が、魯迅的精神——生き方として受取れるためには、新人たちは余りにも若く、振棄てるべき過去の文化的教養を欠いているのである。多少の例外もあるが、空騒ぎばかりで、ろくな小説も書けぬ連中が「中国のゴルキイ」を取捲いている。この連中は、魯迅の尻馬に乗って小品文派を攻撃はするが、己の負担に於て文化を改革する熱意を示さない。

最近の魯迅については知る所が甚だ少い。日頃、雑誌類をあまり読まぬし、この魯迅論を書く前に一とおり目を通すつもりの著作の、実は半ばに及ばず、特に転換後に書かれたものには殆ど触れていない。たとい全部を読み得たとしても、恐らく魯迅を理解することは困難だろうと思う。魯迅の問題が全体の問題を包括するからである。

（ここまで書いてから、近着の雑誌を拾い読みしている中に、考が変ってきた。所詮、これも閑文字に過ぎなかったかの感が深い。近ごろの文章は、切迫した、荒々しい息吹がきこえるばかりで、他に何も伝えていない。泰平に狂れた眼に見透し難い現実の奥底を、もっと綿密に探るべきだったよう

にも思える。）

魯迅は文学の優位を信じない。文学の世界の存在を信じないのではなく、文学の世界が、そのものとしてあることを許容しないのである。彼が、青年に、自国の古典を読むことを禁ずるのは、呉稚暉などの場合と異り、広い意味の文化主義的啓蒙という、彼一流の功利的な立場から生れてくる。自国の古典を読むより、西欧の近代精神に触れることが、思想の嫩い青年にとって有益であると彼の体験が教えるのである。従ってそれは、版画の奨励や、漢字ラテン化運動の指導などとも一線に連る魯迅の文化工作を表す。これは特に転換後に生れた思想ではなく、前にも書いたように、彼の本源的な矛盾が、清算されることなく、新しい事態に適応して形を変えているものに過ぎない。だから、この反面には、彼が文学を、極めて純粋な、殆ど価値だけの世界に於て観念しているとも言えるのでないだろうか。初期に書かれた「中国小説史略」を引合に出すのは不当かもしれないが、ここでは彼の異常に鋭敏な嗅覚が作品弁別に働いているだけで、歴史的探求の意欲は少しも見られない。増田氏も訳書の序文に指摘する如く、これは後年の魯迅の不満とするところであろう。しかし、その不満が如何なる解決を要求するかを、まだ魯迅の口からきかぬように思う。

彼が、潔癖に近い純粋さを示すのは、古典に対する保有欲ばかりではない。文学を政治主義的偏向から守るためにも、時に極めて忠実である。このことは一見、魯迅が、崩れかかる文学の大道を支えて謬らないという印象を与え易いのであるが、しかし人は彼から、いつも積極的に定立された方向を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.